様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３１３８

研究課題名（和文）近現代南アジアにおける中下層の消費と社会・文化表象：軽工業製品雑貨の市場の多様性

研究課題名（英文）Consumption among Lower/middle Classes and Socio-cultural Representations in Modern India: Diversity/multiplicity of Market in the Light Industrial Products

研究代表者
大石　高志（Oishi, Takashi）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：７０３４７５１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代インドにおいて際立った社会・文化性や政治性を帯同しながら消費された軽工業製品雑貨（輸入品や国産品）を指摘して、そうした商品の流通や消費を通じて発現した社会経済的な中下層の人々の社会・文化的動態や、それに連動した商品・市場の多様性・重層性についての分析を進めた。研究期間を通じて、そのような課題の解明を前提として、装身品（硝子製腕輪など）、嗜好品（タバコなど）、生活雑貨（燐寸（マッチ）など）を事例的に取り上げて、同時代の資料から、製造や流通、消費のあり方について研究・探求を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
植民地支配下の近代インドでは、イギリスなど西欧諸国からもたらされた商品の普及が生じたが、他方、ナショナリズムや様々な社会・経済・文化的な志向・運動のなかで、モノや物品の消費、装着、所持に結び付いて、独自に様々な社会性を顕現させる動きが生じたと考えられる。本研究はこうした動きを指摘し、特に、社会経済的な中下層の人々の間で流通・消費の台頭を見た、相対的に安価でしかし意匠性や差別化なども確保された雑貨（国産品や輸入品（特に日本製品））に焦点を当てた。本研究の学術的意義は、モノや商品に帯同されたこうした社会性に、特定の装身品や嗜好品、生活雑貨の具体的な詳細に立ち入って検討・分析を加えたことになろう。

研究成果の概要（英文）：Putting focus on some particular sundry goods, both imported and domestically made, which took on some socio-cultural as well as political connotations in modern India, this research project titled “Consumption among Lower/middle Classes and Socio-cultural Representations in Modern India: Diversity/multiplicity of Market in the Light Industrial Products” has analysed the consumption practices among socio-economically lower class people as well as the diversity/multiplicity of market those commodities formulated. For this purpose, the research illuminated some concrete examples including particular ornaments (glass-made, etc), tobacco products, matches, etc., utilizing various original historical sources.

研究分野：アジア社会経済史

キーワード：インド　軽工業製品雑貨　消費　アジア間貿易　商人ネットワーク　市場の多様性　硝子製品　嗜好品

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）インド人商人・起業家とそのネットワーク：研究代表者は、19 世紀後半から 20 世紀中葉のインド（南アジア）や環インド洋世界、そして日本を含む東アジアにおけるインド人商人や起業家とその広域ネットワーク、そして彼等に担われた商品について研究してきており、本研究は、こうした研究の延長・発展上で、特に、商品の市場や消費と、それに投影された同時代の経済、文化、政治の動態について探求を行うことを目的とした。

（２）軽工業製品（雑貨）とその消費：インド人の商人・起業家の広域ネットワークが特に流通・製造に関わった特定の商品群が存在することが、徐々に明らかになってきた。戦前の日本、特に阪神地域からインドへ輸入され大量に流通したものも含めて、例えば、マッチ（燐寸）、硝子製の腕輪やビーズ、タバコ（煙草）製品、香油・香水などである。嗜好性や選好性を伴うこれらの軽工業製品雑貨は、結果的に、在来のインドで優勢であった伝統的もしくは正統的な物品や西欧からの輸入品を代替したり、部分的に市場で併存したりしながら、社会経済的な中下層を中心に消費されたものであり、そうした消費の社会性を探求する重要性が明らかになっていた。

（３）既存の経済史研究との架橋：南アジア研究では、在地社会での土地保有・所有（カースト関係も含めて）の歴史的動態などに焦点を当てる経済史研究の蓄積と進展があり（例えば、南インドでの水島司や柳沢悠）、その中で、柳澤（2014）の例のように、近現代インドにおける中下層の人々の自立化を指摘しつつ、その延長上で独自の消費傾向に関する指摘・示唆を行うものが見られるようになってきた。本課題研究は、結果的に、自身の進めてきた商人や商品に関する研究を、こうした中下層の人々の自立化やその消費の問題と結びつけて、両者の有機的連関の理解・解明に取り組むものと位置付けられよう。

２．研究の目的
（１）中下層民の自立化と消費の関係：本研究課題では、近代インドにおいて軽工業製品雑貨の消費を媒介として発現した中下層の人々の社会･文化的表象を研究対象として見据えた。つまり、商品や市場における多様性や重層性の析出を通じて、近現代インドにおける中下層民の経済的自立化や社会・政治・文化的な自己表象の台頭を、同時代の社会動態全般やインド人中間エリート層や外来の文化・商品との間での模倣や模造、差別化などの諸関係性のなかで検証することを研究上の目的もしくは念頭に置いた。こうした際、嗜好性や選好性が反映されたと想定される特定の嗜好品や飲食品、装身具、美容・衛生関係品などを、外来品の国産化/現地化を含む商品の措定・消費過程における、在来的な文化規範の変容や社会的葛藤などを捉える素材として、積極的に分析の対象に置いた。

（２）嗜好性や選好性を反映した商品：本研究課題では、中下層の人々の自立化やその新しい社会性を反映させた具体的な商品やモノを、より明確に歴史資料のなかで検討・析出し、そこに帯同された嗜好性や選好性の特質を解明する素材として確保することが、不可欠の根幹的課題となった。この点、研究代表者が、これまで研究対象に置いてきた商品（例えばマッチ）の分析の発展的継続に加えて、申請者が予備的な研究を行ってきた幾つかの商品群を、さらに明示的な研究素材として措定することを目的にした。例えば、タバコ葉の代わりに特定の樹種の葉で巻いた簡易で安価なシガレット（ビーディーもしくはビーリー）、硝子製の装身具（バングルやビーズ）、様々な植物性素材を原料とした整髪・衛生関係の香油・香水である。

（３）消費と市場の諸問題：近代インドにおける消費と市場の諸問題については、関連の研究（例えば（Haynes et.al.　2010））が出版されたことも相まって、近年、関心と研究が活発になってきたと言えよう。ただ、そのなかでは、奢侈品や上級品、欧州からの輸入品、そしてそれと関連した貴族文化や植民地エリートや中間層などに関する研究が、先行してきたと言えよう。本研究課題で、中低価格の商品や中下層の人々の消費に焦点を当てる設定を行った背景・目的には、こうした研究上の背景も大きい。

３．研究の方法
（１）植民地期統計資料の精査と析出：イギリス領植民地期のインドやその周辺（例えば旧セイロン）の社会経済史研究においては、19 世紀後半、植民地行政の中で相当の精度を伴う貿易や流通統計が蓄積されており（特に、個別の商品や物品について）、その精査や検討は、南アジア研究のなかで現在進行中である。本研究課題においては、商品やモノの消費に関連して、可能な限りの量的な把握を行うことを、研究課題の基幹的作業とした。

（２）文書館資料の分析：研究課題の期間、インドやイギリス、スリランカなど国立や州立の文書館を訪問し、諸物産の流通、生産、労働などを管理する経済政策やその関連の多様な問題について、当時の行政文書などを閲覧・参照する機会を得た。

（３）商業資料など、その他史料の渉猟：インド人の商人・起業家の事業に直接的に関連する資料は、それが確保された場合、取り扱い商品に関係する極めて有用な資料となるので、研究代表者は、鋭意、その渉猟や探求に取り組んできた。本研究課題でも、販売促進用の当時の商家資料などを、分析の対象に含めた。

４．研究成果

（１）中下層と結びついた商品・物品と市場・消費の多様性：本研究課題の遂行によって、近現代南アジアにおいて、中下層の自立化を消費と社会・文化表象との関係性の中で検証するための商品・物品について、相当の具体性をもって措定することが出来た。研究代表者が従来から研究対象の一部に含めてきたマッチ（燐寸）については、拙稿“Comparative Perspectives on the Intraregional Networks of Indian Merchants: a Review of the Match Economy from the Perspective of the State and “Big Business””（2019）や学会報告「近代日本のマッチ製造業とアジア市場との接続：兵庫県中西部の中小工場群に関する社会経済史的分析」（2018）などを発表して、商標ラベルにおける図像と文化表象の問題を含めて、インド市場における中下層の消費との接合関係の指摘に及んだ。また、点火具としての燐寸との連動も踏まえて、簡易シガレットであるビーディー（ビーリー）の研究を、押し進めることができた。マッチという軽便で安価な点火具の普及に後押しもしくは結びついて、中下層の人々に供される国産の模倣的なシガレットであるビーディー（ビーリー）が台頭し、そこに、同時に、相対的に高価な輸入シガレットと一線を画すべきある種の政治・社会的な表象も帯同されたことについて、基盤的理解が得られた。このほか、インドにおける伝統的な貴族文化や宗教的な正統性・規範性を背負った高価な装身品との対比的もしくは代替的な意味合いにおいて、金銀や真珠というような希少な素材品を一部代替する形で、20 世紀に入って急速に消費が伸長した硝子製（そして法螺貝）の腕輪（バングル)やビーズが台頭したことについても、一定の数量的裏付けと共に、明らかになった。これらについては、拙稿「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境：開放性と多様性の再編」（2019 年）などにより、その歴史的文脈を跡付けている。

（２）インド人の商人・起業家のネットワークと広域インフラの援用性：植民地期の統計資料や文書館資料の精査や整理、さらに個別商家の事例研究との突合せを進めることにより、こうした特定の商品・物品の製造・流通について、具体像を確保する作業を推し進めることが出来た。興味深い点の１つは、ビーディー（ビーリー）やガラス製腕輪の 1910－20 年代における台頭のなかで、鉄道という植民地経済に根差すインフラが、インド人の商人・起業家のネットワークによって、インドの各地の原材料の供給地や製造地としての優位性や適性を有機的に結び付ける新しい製造・流通事業のために効果的に利用されたことであろう。鉄道という植民地インフラについては、植民地港湾都市を起点とした扇状的ベクトルとその向こうに広がるイギリス主導の国際経済の中にインド内陸部が捕捉されるようなツールや装置の文脈で、従来は理解されていたが、そうしたものとは全く異なる機能と物流ベクトルを、インド人商人・起業家が援用的に創造したということになろう。これは、こうした国内市場志向型の商品経済の登場と鉄道インフラとの関係についての知見（杉原　2015）を、具体的な商品・物品の事例で、本課題研究が示していることになろう（学会報告「近代インドにおける国内市場型商品としてのビーディー（煙草）の成立」(『報告要旨集』にも掲載）(2017 年）や「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境：開放性と多様性の再編」（2019 年))。インド人の商人・起業家とそのネットワークについては、このほかにも、環インド洋世界の文脈にも及ぶこうした広域インフラの援用や滞留先での現地製造業者との連携などの指摘を含めて、拙稿「インド人移民・商人のネットワーク：環インド世界における生存確保と経済成長の牽引」（2019）や大石・曽「近現代横浜・神戸における移民の多様性：その類似点と相違点」(2021 予定）などの発表により、研究を押し進めることが出来た。

（３）素材・資源の問題：中下層の人々と結びついて台頭したビーディー（ビーリー）や装身品（腕輪やビーズなど）の台頭は、原料資源の確保の問題と不可分に結び付いていたことが、あらためて浮き彫りになった。例えば、ビーディー（ビーリー）におけるタバコ葉を装填するテンドゥという特定の樹木の葉の確保の問題や、装身具の素材となった法螺貝などの問題である。こうした素材の確保の問題は、自然生態環境や丘陵地民や海洋沿岸地民の問題も含めて、拙稿「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境：開放性と多様性の再編」（2019 年)）などで予備的な指摘に及んだ。

＜参照した研究文献＞

柳澤悠『現代インド経済：発展の淵源・軌跡・展望』東京大学出版会、2014 年

Douglas E. Haynes, Abigail McGowan, Tirthankar Roy, Haruka Yanagisawa ed. *Towards a History of Consumption in South Asia*, Oxford University Press, 2010.

杉原薫「植民地期における国内市場の成立」、田辺明生・杉原薫・脇村孝平編『シリーズ現代インド１　多様性社会の挑戦』、東京大学出版会、197-221 頁、 2015 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大石高志・曽士才	４．巻 未定（掲載決定済）
２．論文標題 「近現代横浜・神戸における移民の多様性：その類似点と相違点」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『社会経済史学』	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 ネットワークと地域：インド人商人と神戸/兵庫県に関する研究からの視座（コメント）
３．学会等名 社会経済史学会（全国大会）パネル「近現代横浜における国内外移民集団の展開について」
４．発表年 2019年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 近代日本のマッチ製造業とアジア市場との接続：兵庫県中西部の中小工場群に関する社会経済史的分析
３．学会等名 社会経済史学会　87回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 プランテーションと生存：インド史からグローバル・ヒストリーへの架橋
３．学会等名 「プランテーションと生存：近代の移民労働者における食糧確保と土地問題」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境：開放性と多様性の再編」
３．学会等名 「南アジア地域研究」KINDAS研究グループ1『KINDAS研究グループ１研究報告集』第1回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 「植民地フロンティア」としてのセイロンとインド南端」
３．学会等名 「南アジア地域研究」KINDAS研究グループ1『KINDAS研究グループ１研究報告集』第2回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 「環インド洋交易史と周辺地域史との接続：近代インドでの装身品市場を焦点にして」
３．学会等名 脇村孝平先生退官記念懇親研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 近代インドにおける国内市場型商品としてのビーディー（煙草）の成立：旧中央州の製造拠点形成と連関した地域経済と広域流通の動態を中心にして
３．学会等名 社会経済史学会　第86回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 戦前の神戸 / 大阪におけるインド人商人の「資産」：新史料を踏まえた歴史的動態 の分析
３．学会等名 日本南アジア学会　第30回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 神戸/兵庫県における輸出地場産業としてのマッチ製造業：外国人商人との連携
３．学会等名 神戸華僑華人研究会　創立30周年記念シンポジウム「グローバル神戸の越境力」
４．発表年 2017年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 国内市場志向型商品としてのビーリー(bidi)の台頭：製造、流通、消費
３．学会等名 現代南アジア地域研究　KINDAS研究グループ1-B「南アジアの開放経済」研究会：「開放性と多様性のなかの経済・社会：植民地期インドを焦点にして」
４．発表年 2017年

１．発表者名 TAKASHI OISHI
２．発表標題 “Western, Indian and Chinese Merchants in Modern Kobe: Gendered Cultures in the Sojourner life”
３．学会等名 神戸大学海港都市研究センター＆ポーツマツ大学PTUC「交差する海港都市：神戸、ポーツマス、その歴史と可能性」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 英領インド期中央州における農林工関係：ビーリー製造業の台頭に伴う動態に即して
３．学会等名 現代南アジア地域研究　KINDAS研究グループ1-B「南アジアの開放経済」研究会：「開放性と多様性のなかの経済・社会：植民地期インドを焦点にして」
４．発表年 2020年

１．発表者名 大石高志
２．発表標題 移民を通じた接続ゲインの歴史的諸相：環インド洋地域と環太平洋地域（日本含む）
３．学会等名 科研費研究会「近現代における環インド洋熱帯地域の複数発展径路」（代表：脇村孝平）2020年度研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Chi-cheung Choi, Takashi Oishi and Tomoko Shiroyama ed.	４．発行年 2019年
２．出版社 Brill:Leiden	５．総ページ数 x, 355 pp.（執筆分：190－228pp）
３．書名 Chinese and Indian Merchants in Modern Asia: Networking Businesses and Formation of Regional Economy（大石執筆分：“Comparative Perspectives on the Intraregional Networks of Indian Merchants: a Review of the Match Economy from the Perspective of the State and “Big Business””）	

１．著者名 藤田幸一・大石高志・小茄子川学　共編著	４．発行年 2019年
２．出版社 人間文化研究機構「南アジア地域研究」京都大学中心拠点・研究グループ１	５．総ページ数 108頁（執筆分：73－91頁）
３．書名 『南アジアの人口・資源・環境：生態環境要因を重視した南アジアの長期発展径路解明のための中間報告』（大石執筆分：「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境：開放性と多様性の再編」）	

１．著者名 長崎暢子編（大石分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 632頁（執筆分：444－456頁）
３．書名 『世界歴史大系　南アジア史４　近現代』（大石執筆分：「インド人移民・商人のネットワーク：環インド世界における生存確保と経済成長の牽引」））	

１．著者名 馬場哲等編（大石分担執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 未定（執筆分2頁）
３．書名 『社会経済史学事典』（大石執筆分：「印僑」（中項目））	

〔産業財産権〕

〔その他〕

神戸市外国語大学　大石高志
http://www.kobe-cufs.ac.jp/institute/faculty/oishi.html
リサーチマップ　大石高志
https://researchmap.jp/read0083541

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関